様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 8 日現在

機関番号：１３５０１
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2009～2011
課題番号：２１５２０１８６
研究課題名（和文）近代文学成立期における三遊亭円朝の研究
研究課題名（英文）Study of Sanyu-tei Encho in the establishment period of Modern literature
研究代表者
中丸　宣明（NAKAMARU NOBUAKI）
山梨大学・教育人間科学部・教授
研究者番号：80198184

研究成果の概要（和文）：三遊亭圓朝の作品は、多く新聞や雑誌などに発表された後に単行本として出版されたが、本研究では、その二者の本文の比較研究をおこなった。具体的には「やまと新聞」の新たに発見された欠号を利用し、三遊亭圓朝の「蝦夷錦故郷の家土産」における初出本文と単行本本文を比較し、そのオーラルな性格と説話の伝統のせめぎ合いを析出するとともに、新聞・雑誌における圓朝作品の初出のあり方についての分析をした。

研究成果の概要（英文）：I studied comparative study with the first to go out text and the book text on Sanyu-tei Encho’s works. Specifically about「蝦夷錦故郷の家土産」、I studied on relations with the spoken language and the written language. At the same time、I studied Sanyu-tei Encho’s works in newspapers and magazines.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	800,000	240,000	1,040,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
2011 年度	200,000	60,000	260,000
年度			
年度			
総　計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・日本文学
キーワード：日本近代文学、話芸、物語消費

１．研究開始当初の背景

幕末から明治期における三遊亭円朝の話芸ないし創作人情噺の研究は、近代文学と江戸文学との関係を連続の相のもとにおいてとらえようとする近代文学の再評価の流れの中で始められた。越智治雄における「真景累ヶ淵」や「塩原多助一代記」などに対する研究（『近代文学成立期の研究』84.6 岩波書店）や永井啓夫の伝記研究（『三遊亭円朝』62.12 青蛙房）などの先駆的な研究に出発し、近代自我史観に疑義を提出した前田愛、近世文学プロパーからの実証的アプローチを試みた延広真治、「怪談牡丹灯籠」の注釈を試みた興津要らによって推進されてきた。

それらの研究は、幕末明治期の「真景累ヶ

淵」「怪談牡丹灯籠」「塩原多助一代記」といった著名作品の追求に集中しやすく、円朝の話芸の全体像、メディアとの関係のありようなど必ずしも十分に考究されているとはいえなかった。ようやく近年、研究は多様性を見せ始めている。「粟田口霑笛竹」「後開榛名の梅が香」「操競女学校」といったこれまであまり光が当てられてこなかった作品の「描写」を論じた高橋光男の論考、あるいは「欧州小説　黄薔薇」を論じた小松史生子の論考、シェークスピアとの関連をその怪談にみる百瀬泉の論考、「蝦夷錦古郷家土産」と「欧州奇談夢の暁」を俎上に載せた中込重明の論考などはそれぞれの視点から「翻案」ないし西洋文学の影響を論じたものである。また著名作品を中心として現今のカルチュアルスタディの方法の応用など多様な方法論が試みられている。むろん注釈作業（延広による「牡丹灯籠」の注釈、「岩波新古典文学　明治編」や資料の紹介（延広の翻刻三遊亭円朝自筆の「西洋人情噺」、同自筆「元祖　荻江露友之伝」、中込による人情本「花菖蒲澤の紫」などの翻刻）もすすめられて、円朝研究はようやく進展を見せている。

上記円朝研究と関連する形で、存在しなければならないのがメディア研究である。文学メディアのあり方は、特に明治期以降、「我楽多文庫」に始まると目される同人誌や「新小説」や「文芸倶楽部」というような商業誌、「中央公論」や「太陽」のような総合誌に注目され研究されては来たが、江戸期の草双紙読者に「読み物」や「読み見る物」を供給したメディアの研究は、明治初年代の、いわゆる小新聞の動向のみが、山田俊治や土屋礼子の先駆的な研究に支えられている有様であった。

２．研究の目的

前項に述べたような研究状況の中で、これまでの研究の不足を補い、新視点を導入することで三遊亭円朝の話芸ないし創作人情話の動向と近代文学の形成過程との関係について新たなる展開を開こうとするものである。これまでの研究に不足していたものは、本文の異同、諸本の流通の実態に関する研究、速記本以前の噺の人情本化合巻化の考察、明治二十年代中期の活動と「大衆文学」前史とのかかわりに関する考察などである。

(1)　記本以前の円朝作品の合巻化・人情本化の実態の究明。つまり「花菖蒲澤の紫」（明治元、山々亭有人補綴）「菊模様皿山奇談」（明治四、山々亭有人補綴）、「今朝春三組杯」（明治五、山々亭有人補綴）、「雪月花三遊新話」（明治十三年、笠亭仙果録）の諸作品の口演との関係、および幕末明治期の戯作、なかんずく明治式合巻形成史における役割とその位置づけ。

(2)　明治十七年に若林玵蔵酒井昇造らによって試みられた円朝の創作人情話の速記は、文学史上にエポックをなす出版物となるが、その初版の意味ないし文学的影響は問題とされることはあっても、それらがどのように流通・消費され、またメディアミックスの中で変容を受けたかについては、等閑に付されてきたといわざるを得ない。そこで、本研究では、まず初出が逐次刊行物などにある場合には、そこでの本文のあり方（挿絵等との関係・新聞雑誌誌面との有機的な関係などへの考察を含む）を初発とし、初刊本の本文のあり方、再刊本の諸相をその変化のありようを実証的に押さえることを手始めに、本文の流通・受容の

あり方にアプローチする。とくに、再刊本は版権のめまぐるしい移譲や俗に言うところの海賊版の出版も含めて、多様な変化を被っており、大川屋や榎本法令館といった貸本屋向けのいわゆる赤本、また出版社も判然としない縁日や絵草紙屋（昭和初期まで現存）といった物語消費の末端まで追尋する。

(3)　円朝作品は、円朝自身で「芝居噺」として演じられたことも多く、円朝が素話に転じた歌舞伎や新派、あるいは歌謡、のちも、弟子の三遊亭円楽（後の三遊一朝）に受け継がれ演じられ続けたが、それのみならず、歌舞伎や新派の舞台に取り上げられることも多かった。また歌謡・軽演劇等のさまざまなジャンルの中で変奏され続けた。その様態を当時の文化的状況と絡めて、可能な限り探求する。

３．研究の方法

前記研究目的を達成するための方法として特に新しい方法があるわけではなく、伝統的「国文学」の実証研究とテクスト研究の方法によるが具体的には以下の２点によることを企図した。以下は研究当初における「計画」であるが、実際の研究遂行の過程、資料調査の実際の状況への対応により、変化し結果として成果寄与したが、その変化と成果の相関および実際は「４、研究成果」に述べる。

(1)　第１点は、円朝の噺の戯作化の諸相を円朝作品に内在する視点および当時の戯作界の動向という外在する視点の双方からおこなう。内在する視点とは、高座におけるその実態と合巻ないし人情本の比較研究であるが、当然その時代の口演の速記は存在しない。そこで、後の口演速記、弟子や芸統を継ぐ噺家たちによる口演速記・ないし記録（たとえば八代林家正蔵のものであれば録音もある）を探索し、補助資料とする。また、「花菖蒲澤の紫」と「今朝春三組杯」はもと同一の作品の合巻化であり人情本であるわけであるが、そのジャンルの違いをふまえた上でテクスト分析をこころみることによってこの時代の戯作と話芸の関係を措定しうる。これらの研究も基本的には、諸本の探索、周辺諸資料の調査のウエイトが初年度は高くなる。外在する視点とは、円朝と同時代の戯作者の動向と、円朝の活動との比較・検討である。円朝は幕末期から三題噺の会等において当時の戯作者・絵師・歌舞伎作者などと交流し、その影響を受けていた。特に山々亭有人、武田交来、仮名垣魯文等の戯作者との関係は注目に値し、円朝の作品の戯作化も同時代の他の戯作界の動向との関連でみなおすことによって新見解が期待できる。

(2)　第２点は円朝の創作人情噺の多くが、速記によって広まったが、その実態は存外明らかにされてはいない。無論「真景累ヶ淵」や「怪談牡丹灯籠」などといった有名作の、刊行当時の問題や影響関係は問題とされてきたが、それがそれ以後どのように受容されたか、どのような影響力を持ったかは明らかではない。そこで次のような研究が必要となる。

円朝作品の速記本は明治二十年代にはいると、さまざまな出版社から

様々な版で出版されるが、その実態はまったく明らかにされていない。朝本を手がけた文事堂・金泉堂・駸々堂・金桜堂・新庄堂・上田屋・中礼堂といった出版社の活動をその出版目録や新聞雑誌に見られる記事などから明らかにする。また昭和期に至るまで貸本屋を中心に書籍を供給した大川屋や榎本法令館といったいわゆる赤本屋における円朝本の位置について明らかにする。その調査を受け、どのような状況で円朝本が流通し、どのような読書環境が存在し、どのような読者がいたかを明らかにする。上記研究と平行し、諸本における本文の異同、口絵・挿絵、書形態の変化を明らかにする。新聞初出の場合、その本文の異同などは、上記と同様の手続きでおこなうが、とくに「やまと新聞」を中心に、明治二十年代のかつての「小新聞」の伝統を受け継ぐ新聞が、どのように円朝作品を遇し、どのような読書環境があり、どのような読者がそこにいたのかを探るとともに、メディアとしての新聞がどのように明治二十年代の文学に影響を与えたかを明らかにする。この研究に関しては初段階においては、主に資料の所在調査、購入・複写等の手段を講じて収集に努めるものとする。

４．研究成果

まず、基礎資料の収集に関する成果をあげなければならない。円朝の作品発表の場は、明治以降、晩年に至るまで、新聞は「やまと新聞」を中心にし、その初出に手を加え、単行本（多くは明治期の擬洋風書籍であるボール表紙本）として、文事堂・金泉堂・駸々堂・金桜堂・新庄堂・上田屋・中礼堂などの書肆から発行された。以上のことはほぼこれまでの常識であったが、これに加えて２点の成果を付け加えることが出来た。

(1)　「やまと新聞」の欠号の補完。出版関係者の協力を得て、国会図書館・東京大学明治新聞雑誌文庫・東京大学社会情報研究所等に未所蔵の欠号分を発見し、円朝作品初出のありようを確認できた。

(2)　これまであまり円朝作品の発表の場として小新聞の流れをくむ「やまと新聞」などの新聞紙上、ないし前記出版社からの単行本、他の落語家などとの合著などが考えられてきたが、今回、小新聞に附属する形で出現し、講談や落語の速記掲載誌の有力な存在となるが、その読み捨てにされる消費的「商品」としての性格から残存が少なく、国立国会図書館・東京大学明治新聞雑誌文庫・日本近代文学館にも十分な所蔵は確認されていなかったが、今回の研究のなかで多くの欠号を発見、研究の基礎資料となすことができた。具体的誌名としては「人情世界」「有喜世の花」「婦美之錦」「文の錦」などである。

上記(1)(2)の資料的探求の成果の上に立って次の(3)(4)の成果を得た。

(3)　円朝後期の作品であり、北海道に取材した「蝦夷錦古郷の家土産」（明治21年）は「やまと新聞」に連載されたものであるが、これまで国会図書館・東京大学社会情報研究所等の所蔵分では欠号が多くその全体像

は不明であったが、福島県立図書館で今回新たに発見された欠号分でかなりの補遺が可能になった。この発見を受けて、予定を変更し、「蝦夷錦古郷の家土産」の研究を主要な研究課題とし、その初出本文と単行本本文との校合、比較研究に従い、さらに円朝作品のオーラルな側面と書記言語の鬩ぎ合いや、その記述を支えているさまざまな事象への注釈的研究、またその作品にこめられた日本近代における植民と先住民の関係を相対化する円朝の情念のありようなどを考察した。さらに、「蝦夷錦古郷の家土産」の続編である「椿説蝦夷訛」（明治 26 年）の研究に着手し、「蝦夷錦古郷の家土産」における研究の進展を図るとともに、その過程のなかで、円朝作品の単行化の実態研究、たとえば書肆と関係・書籍流通などを中心とする研究をする上に有益なものであった。それは「椿説夷訛」が「三遊屋」という商業出版と自家版とのあわいにあるような一風変わった出版者によるもので、円朝出版のあかたの分析を通して物語消費の実態を明らかにした。

(3)　この方面での発見はなんと言っても「文の錦」の発見が大きい。(2)で示した雑誌は読み捨てにされる「物語消費」の典型的な姿を示すため、残存が少なく、研究は困難を極めるが、このたび札幌市立図書館で多くの欠号が発見された。そこには円朝の「離魂病」が掲載されていた。この作品は後に「お若伊之助」と解題される物であるが、解題も含めその初出と異動の研究。当該雑誌の性格の分析には多くの論証と実証が必要であるが、十分な資料はまだえられていないものの、それらの読者が、小新聞の「つづきもの」ないし「雑報欄」の読者を受け継いでいたこと、そしてその読者は近世後期の戯作（合巻・滑稽本・人情本等）の読者の系譜の中にあると同時に小新聞の雑報のもつ当代追従性・同時代性を併せ持ったものであることを、明らかにしその需めに応ずる円朝作品のあり方の分析ができた。また、前項(3)での新聞初出との比較による速記のありようと比較した時、よりアクチュアルに時代に即応しようとした円朝の姿を析出した。また、「人情世界」において円朝作品は増刊などの特別な号に掲載されることが多く、当時の円朝作品の位置を示す物であることを明らかにした。

上記(3)(4)の成果については、実証と考証に基づく本文の全体像や個々の注釈によるものであり。ここに「定理」ないし「公式」のようなものとして提示できる性格のものではない。(3)に関しては岩波書店から来年度刊行開始される「円朝全集」（「蝦夷錦古郷の家土産」「椿説蝦夷訛」所収巻）の中での本文作成・注釈・解説でその全体像を提示することとし、(4)に関しては雑誌「文学」（2013 年 3 月刊）に掲載予定の論文で報告する予定である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）

中丸宣明、研究余滴−円朝の声−、日本文学、

査読無、61 巻 6 号、2012.6、48-49

６．研究組織

(1)研究代表者

中丸　宣明（NAKAMARU NOBUAKI）
山梨大学・教育人間科学部・教授
研究者番号：80198184

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし

、